一反通遺跡（第 5 次）発掘調査結果概要報告

所 在 地　鈴鹿市上野町字西久保
事業主体　個人
調査目的　個人住宅建設に係る埋蔵文化財の記録保存
調査期間　平成 30 年 9 月 10 日～平成 30 年 10 月 12 日
調査面積　約 184㎡
調査主体　鈴鹿市 文化スポーツ部 文化財課
調査担当　田部剛士

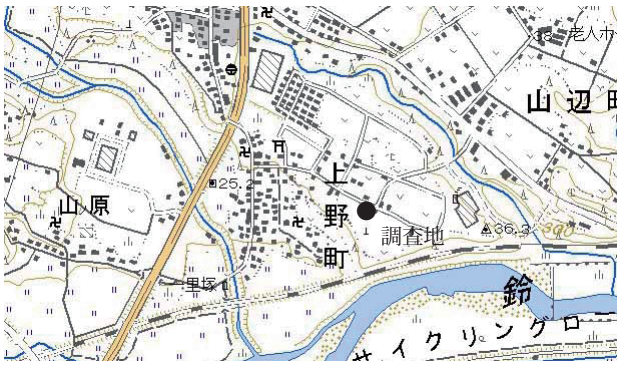

図 1　調査位置図（1/25,000）
（国土地理院発行の 2 万 5 千分の 1 地形図「鈴鹿」を使用）

1　調査の経緯と経過

平成 30 年 8 月 29 日に事前の範囲確認調査を実施した結果，弥生土器を含む遺構が確認されたため，建物の基礎部分と駐車場及び浄化槽の造成部分を対象として本発掘調査を実施することとした（図 2）。

調査は平成 30 年 9 月 10 日から着手し，平成 30 年 10 月 12 日まで行った。約 1 ヶ月の調査期間があったが，天候の悪い日が多く，実働は延べ 12 日と少ない。

調査は駐車場及び浄化槽の造成部分を北区とし，建物の範囲を南区として行った。調査対象地の北東隅の境界プレート天端を仮の基準点（KBM ± 0）とし，高さについては KBM+ ○ mm ないし KBM- ○ mm と表記する。

北区はほぼ道路面まで床下げするため，KBM-100mm までを調査対象とした。また，南側は KBM+500mm までとし，基礎が深く入る部分のみ KBM+350mm まで調査することにした。その結果，調査面積としては約 184 ㎡あるが，完全に遺構を掘削しきらずに現地保存されているものも多くある。

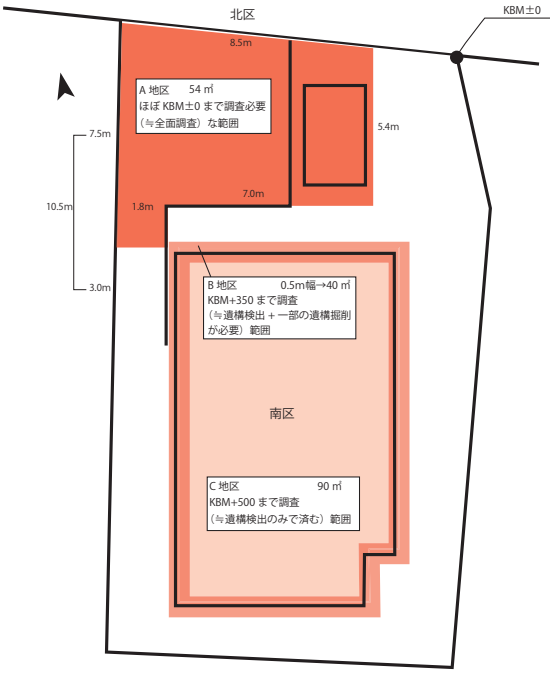

図 2　第 5 次調査区（1/250）

2　位置と環境

一反通遺跡は，鈴鹿市の北部を東流する鈴鹿川の左岸の台地上に位置する。この台地上には，弥生時代の集落跡や墓域が多く確認されている。一反通遺跡の北側には添遺跡が広がり，東側には南山遺跡，磐城山遺跡，沖ノ坂遺跡，中尾山遺跡，境谷遺跡，寺山遺跡，西ノ岡 A･B 遺跡，扇広遺跡，東ノ岡遺跡，白子野遺跡，青谷遺跡，茶山遺跡と多くの遺跡が周知されている。一反通遺跡はこれらの遺跡の中で最も西側に相当し，以西は数 km にわたって弥生時代の遺跡は確認されていない。

さて，一反通遺跡はこれまで 4 回の発掘調査が実施されている。いずれも，今回の第 5 次調査区の北東で調査されている。第 1 次調査は道路建設に伴う発掘調査で，5 mの幅で東西 70 mと広い。弥生時代の中期と後期の溝（環濠）や土坑が確認され，市内でも 3 例しかない銅鐸（突線紐式銅鐸）が出土して著名となった。他にも銅鐸形土製品や磨製石鏃等が出土したことから，市内屈指の弥生集落と周知されるようになった。

第 2･3･4 次調査はいずれも個人住宅建設に伴う発掘調査である。第 2 次調査は弥生時代中期の溝が 3 条平行して確認された。溝は環濠と推定され，北東から南西方向へのびている。また，古墳時代と奈良時代の土坑も確認されている。

第 3 次調査は，浄化槽の埋設部分を対象とした 6㎡の小さな調査区である。中世の東西溝 1 条が確認されただけであるが，注目されるのは，事前の範囲確認調査で弥生時代の環濠らしき溝を検出している点である。この溝も北東から南西方向へのびている。

第 4 次調査は，弥生後期の環濠 1 条と弥生前期から中期の竪穴住居等を確認している。環濠はやはり北東から南西方向へのびて見つかった。

このように，一反通遺跡では主に北東から南西方向へのびている弥生時代中期から後期の環濠が幾条も見つかっている。周囲には竪穴住居をはじめとした集落や，方形周溝墓といった墓域が広がっていると推定されるが，発掘調査はそれほど進んでいない。稀少な銅鐸を出土し，弥生前期から後期まで断続的に営まれている有数の遺跡であるが，実態がよく分かっていない遺跡だといえる。

3　検出遺構

第 5 次調査区では，竪穴住居 1 棟，溝 6 条，土坑 2 基，土壙墓かを 1 基，ピット多数を検出した（図 3）。

（1）竪穴住居

SH0505　東西 3.2 m，南北 2.7 m程度の不整方形である。埋土は黒褐色砂礫混シルト層の単層で，検出面からの深さは 0.2 m弱ある。ちょうど中央を SD0501 が貫通しているが，SH0505 の方が古い。西辺と南辺に周壁溝らしき浅い凹みが有するが，東辺及び北辺ははっきりしなかった。内部に柱穴をいくつか有するが，明確な主柱穴や焼土等は確認できていない。出土遺物はそれほど多くないが，奈良時代頃の土師器や須恵器が出土した。

（2）溝

SD0501　北区を貫通する東西溝である。幅 1.0 m，深さ 0.4 m前後で，東西 9m 以上続いている。断面は逆台形を呈し , しっかりとしたつくりである。埋土は灰褐色砂混砂礫層で一度に埋まっているが，しまりがやや甘く，比較的新しい遺構だと推定された。なお，溝の北側の肩部には埋め戻したような痕跡が確認される。ちょうど中央で SD0504 と交差しているが, SD0501 の方が新しい溝である。弥生土器や土師器, 山茶椀, 陶器（常滑焼）等が出土した。弥生土器は下層遺構からの混在であることが明らかで，土師器の羽釜や常滑の捏鉢等が遺構の年代を示す遺物といえる。おそらく，15 ～ 16 世紀の中世後半頃の溝だと考えられる。

SD0502/06　北区の北端を東西方向にのびる溝である。当初，SD0502 の 1 条と理解して掘削を進めたが，西側に進むにつれて 2 段の落ち込みとなっていき，もう 1 条別の溝があることが判明した。そこで，新たに認識した北側の溝を SD0506 として区別した。西壁土層断面の堆積状況から，SD0506 が新しく，SD0502 が古い溝だと理解できた。

SD0502 は幅 2 m以上，深さ 0.45 mの溝である。北側の形状は不明であるが，南側は緩やかに落ち込みながら広く開く。SD0506 は西壁の断面から幅 0.9 m，深さ 0.25 m程度の溝だと推測される。北区の中央北端から調査区外へと続くため，全体に不明確な遺構と言わざるをえない。

出土遺物は SD0502 と SD0506 を混在して取り上げてしまった。弥生土器の他に，土師器や須恵器，山茶椀，陶器等が出土している。下層から混在した弥生土器を除き，土師器の羽釜や陶器が最も新しい年代を示す遺物である。あるいは SD0506 が羽釜や陶器の示す 15 ～ 16 世紀の頃の溝で，SD0502 は山茶椀等の 12 ～ 13 世紀まで遡る溝の可能性も考えられる。

SD0504　北区から南区にかけて確認した，北東から南西方向にのびる溝である。長さは 19 m以上を確認し，広い所の幅は 3.5 mある。深さは約 0.9 mある。やや東へ湾曲しており，直線的でない。重複関係から SD0501 や SD0502，SH0505 よりも古い溝である。また，SD0513 よりも古いが，SX0507 よりは新しいことを確認している。

埋土は 3 ないし 4 層で構成される。上層から黒褐色砂礫混シルト層, 黒褐色砂礫混シルト層（黄色味強い），暗黒褐色シルト層となる。出土遺物は多量の弥生土器と少量の石器がある。1･2 層目に弥生土器が大量に出土したが，いずれも小片であり完形に近い土器は皆無であった。なお，3 層目にはあまり遺物が含まれていなかった。弥生土器には凹線文土器と呼ばれるものが含まれており，その特徴から中期後葉頃の年代が推定できる。なお，破壊の恐れの無い範囲（北区で KBM-100mm，南区で KBM+350 ～ 500mm）は掘削せず，現地保存してある。

SD0510　南区の南西隅で検出した。南壁から北へ僅かにのびた後，西へと屈曲して西壁へと続く。幅は約 1 mで，深さは 0.3 mある。埋土は灰褐色砂混砂礫層でしまりがやや甘く，SD0501 とよく似た埋土と理解

できた。ただし，SD0501 のような裏込めのような堆積は確認できず，断面形状もやや開いた台形を呈する。出土遺物はそれほど多くなく，弥生土器の他，土師器，須恵器，山茶椀，陶器等が出土している。中世後半まで下る遺構だと考えられる。

SD0513　南区で検出した。北東から南西方向にのびる溝で，やや湾曲している。幅は約 3 mあるが，深さは検出のみに留めたため不明である。SX0507 や SX0511，SD0504 よりも新しい。

基本的に黒褐色砂礫混シルト層以下が弥生時代の埋土になろうが，その上面に黄褐色と黒褐色が不均質に混在する造成土が広く覆っている。この造成土は硬くしまり，その上面にいくつかの柱穴が検出される。他の状況から勘案するに，黒褐色砂礫混シルト層のしまりがやや緩いため，その上に造成を行って地盤整備をしているものと判断できる。そしてその時期はおそらく SD0501，SD0510 等の関係から中世後半頃でないかと考えられる。

SD0513 はほぼ掘削をしていないため帰属時期を判別することはできない。ただし，出土している土器はほぼ弥生時代に限られ，かつ SD0504 よりも新しいことから，弥生時代中期後半以降から後期までの間と判断される。

（3）土坑

SX0507　南区の中央北寄りで検出した。北北西に長く伸びるようであるが，両端を SD0504 と SD0513 が重なるため長辺の長さは 4 m以上としか分からない。短辺の長さは 1.5 m前後である。また，検出のみに留めたため深さについては不明である。検出面では暗黒褐色砂礫混シルト層の埋土が確認された。少量の暗褐色のブロックを含み，しまり粘性ともややある。また，炭化物を少量含んでいる。

出土遺物は乏しく不明であるが，SD0504 及び SD0513 よりも古いものであることから，今回の調査区内ので最も古い時期の遺構であり，弥生時代中期後葉を遡る。なお，平成 29 年度に行った一反通遺跡の範囲確認調査でも同じような形状の遺構が確認されており，土壙墓である可能性を指摘しておきたい。

4　出土遺物

今回の調査で出土した遺物は整理箱（55 × 33 × 10cm）で 8 箱に及び，現在整理作業中である。

全体的にみると，出土遺物の約 8 割が SD0504 の弥生土器である。ただし，上・中層からの小片が多く出土し，完形のような土器は出土しなかった。また，下層からはあまり出土しなかった点は特徴として挙げられる。

これに次ぐのは SD0502/06 であるが，混在と理解される弥生土器や須恵器を除くと，それほどの量が認められるわけでない。SD0501 や SD0510 とともに，中世の土師器や山茶椀，常滑焼等を含んでいる。なお，量は少ないが，SH0505 の出土遺物は時期的にまとまっており，奈良時代の貴重な一括資料となりそうである。

今回の調査は全ての遺構を完掘していないので，全体の出土傾向を述べられないが，一部を掘削した状況から，SD0513 は SD0504 よりも出土量が少ない印象を持つ。

5　調査の成果と課題

調査の成果は弥生時代の環濠と推定される溝（SD0504 と SD0513）が確認された点である。いずれも第 2 次調査で確認されている溝の延長だと想定され，SD0504 が SD201，SD0513 が SD202 と一続きである可能性が高い（図 4）。なお，SD201 や SD202 はさらに第 1 次調査の方へのびており，SD202 が SD0107 や同 SD0102 へ続く可能性もある。これらの溝は集落を囲い込むためのものであり，環濠と呼ばれている。あるいは，全周せず，舌状に張り出した台地を遮断するように掘られたものかもしれない。今後，注意して調査を継続する必要がある。

さらに，中世後半頃の溝（SD0501，SD0502/06，SD0510）も挙げられる。中でも，SD0501 と SD0510 の関係は約 14 mの間隔を置いてほぼ平行しているようにみえることから区画溝の可能性がある。その間には比較的柱穴（ピット）が検出されていることから，区画内部に屋敷等の施設が建っていた可能性がある。当地の西方には，既に消滅してしまったが，高富城という中世城館があったとされている。直接関係するかは不明であるが，周囲に該期の遺構が広がっていてもおかしくないので，今後とも継続した調査が必要とされる。

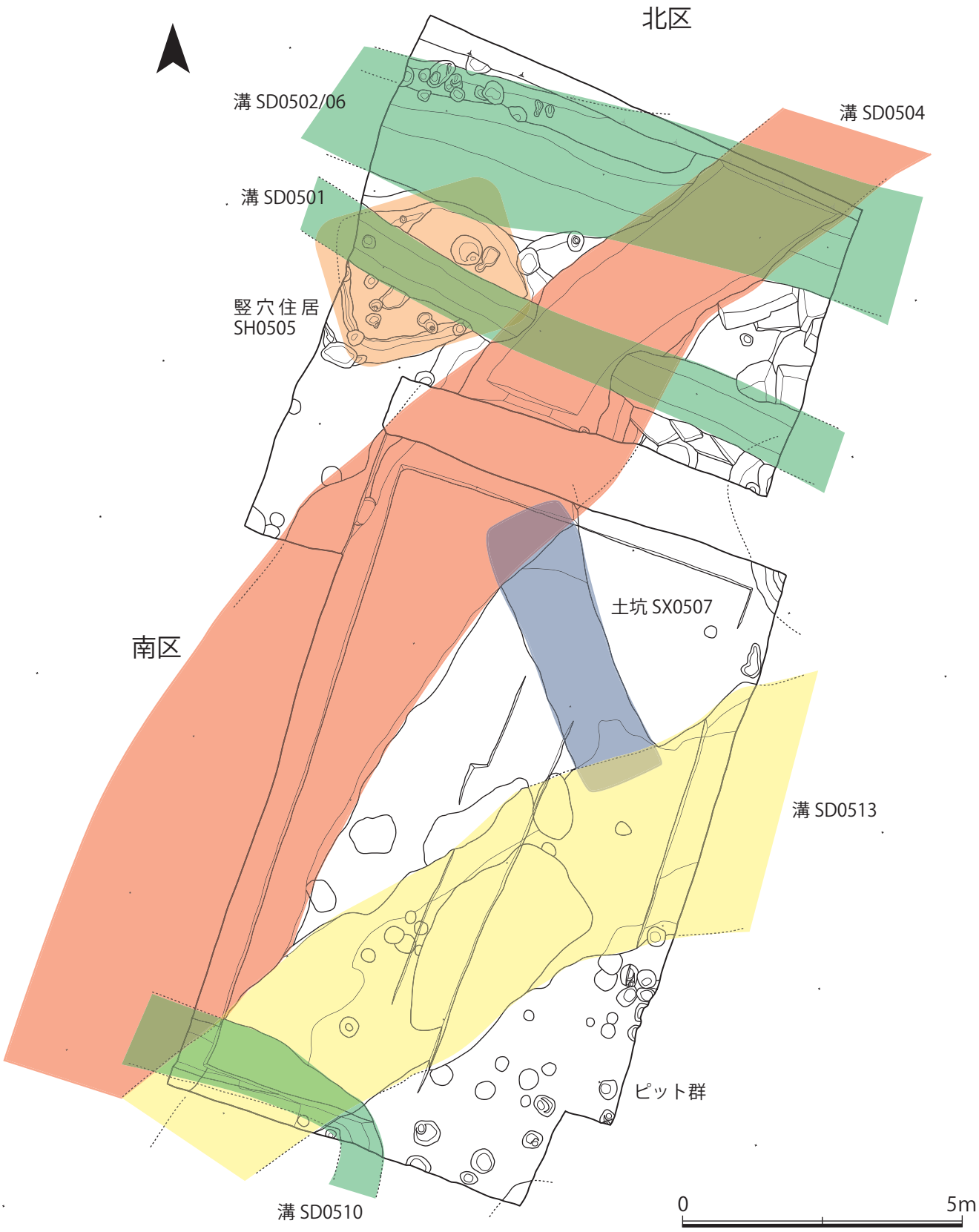

図 3　第 5 次調査区遺構配置図（1/100）

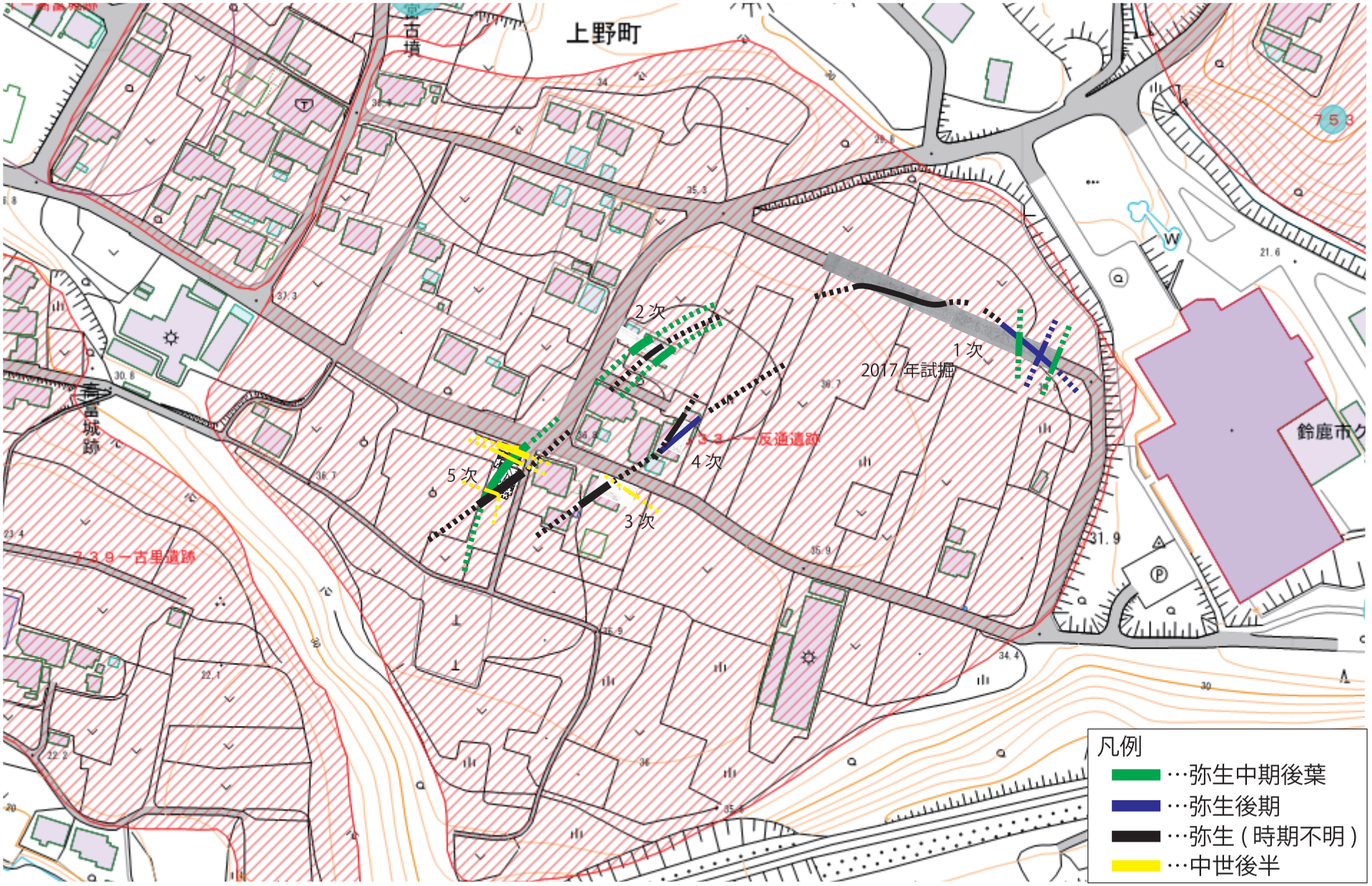

図４　一反通遺跡の溝（環濠）の確認状況（S=1/2,000）

磐城山遺跡（第 11 次）発掘調査結果報告

所 在 地　鈴鹿市木田町
事業主体　個人
調査目的　農地改良工事に係る埋蔵文化財の記録保存
調査期間　平成 30 年 4 月 10 日～平成 31 年 3 月 29 日
調査面積　約 516.2㎡
調査主体　鈴鹿市 文化スポーツ部 文化財課
調査担当　田部剛士

図 1　調査位置図（1/25,000）
（国土地理院発行の 2 万 5 千分の 1 地形図「鈴鹿」を使用）

1　調査の経緯と経過

今回の調査は平成30年度に第11次調査として実施した。発掘調査は平成22年度から継続して行っており，平成 29 年度の第 10 次調査区の北西側を拡張して調査した。

これまでの発掘調査の成果から，磐城山遺跡は主に弥生時代後期（今から約 1,800 年位前）の集落跡として使われていて，後に古墳時代後期頃（今から約 1,500 年位前）にも集落が営まれていることが判明している。今回の調査区でも竪穴住居をはじめとした遺構が発見されることが想像されたが，調査区が西側に進むにつれて室町～戦国時代の木田城跡に関わる遺構も検出されてきているので，相当数の遺構の重複が想定された。

2　位置と環境

鈴鹿川左岸の台地は，「水沢扇状地」と呼ばれ，各地に平坦面が残されている。扇頂部では 250 mあるものの，鈴鹿川左岸の扇端部では 40 mほどまで下がってきている。表面には赤色土がよく発達しており，その下位には礫層が堆積している。磐城山遺跡は，この水沢扇状地の扇端部に位置し，緩やかに傾斜しながら東へ張り出す舌状地形に位置している（図 1）。周囲には同じような舌状の台地が枝状に別れ，そこには多くの遺跡が展開している。

磐城山遺跡周辺では，弥生時代に入ってから遺跡の形成が活発化する。弥生時代の前期には，八重垣神社遺跡で大量の土器を包含する流路が幾筋も確認され，平野部で利用が確認できるようになる。下流に 1.5km 離れた須賀遺跡でも弥生時代中期初頭の環濠や方形周溝墓が確認されている。中期中葉以降は，台地上に遺跡が展開される。寺山遺跡や境谷遺跡等で円形の竪穴住居が散見されているが，少なくとも中期後葉には扇広遺跡や寺山遺跡，境谷遺跡，沖ノ坂遺跡，中尾山遺跡等で方形へと変化することが知られている。また，中期末には中尾山遺跡等の集落が衰退し，方形周溝墓が群集して築かれるようになる。次いで遺跡が大きく展開するのは後期後半の頃で，青谷遺跡や磐城山遺跡，南山遺跡，一反通遺跡等で竪穴住居が多く検出される。この頃の墓域は判然としないが，扇広遺跡や西ノ岡 B 遺跡で方形周溝墓が確認されているので，集落とは離れた丘陵上に群集している可能性がある。なお，後期前半は遺跡の痕跡が希薄といえる。ただし，扇広遺跡や磐城山遺跡で竪穴住居が確認されたり，八重垣神社遺跡で方形周溝墓が検出されたりしているので，近年になってようやくその間が埋まってきた観がある。この意味において，磐城山遺跡の調査は重要な知見をもたらしてくれているといえる。

古墳時代前期初頭に入ると，台地上の青谷遺跡で竪穴住居が残るようであるが，一方で磐城山遺跡等ではほぼ衰退する。環濠も弥生時代後期で埋まっているようで，この時期には平野部の八重垣神社遺跡や宮ノ前遺跡で流路とともに集落跡が確認され，再度低地部へ集落が移動するようである。なお，古墳時代中期の動向は不明確であるが，宮ノ前遺跡で初期須恵器が出土するなど，引き続き低地部に活動拠点があったものと推定される。さらに，宮ノ前遺跡や河田宮之北遺跡などで 6 世紀代の遺物を大量に含む自然河道も確認されており，この頃の居館があった可能性も指摘されている。

一方，鈴鹿川下流域の古墳は，左岸の台地上に残されている。最古のものは寺田山 1 号墳と推定され，全長約 80 mの前方後円墳の柄鏡形を呈す。発掘調査されたことはないが，5 世紀初頭ないしは 4 世紀代に遡る可能性が指摘されている。他の前方後円墳としては，全長約 50 mの富士山 1 号墳，40 m級の高岡山 9 号墳，

14 mの富士山 10 号墳等がある。富士山 1 号墳と高岡山 9 号墳は未発掘だが，富士山 10 号墳は，発掘の結果，埴輪列を伴う 6 世紀初頭の古墳であることが判明している。寺田山 1 号墳が盟主的な古墳であり，富士山 1 号墳等がそれに後続する古墳になるのであろう。周囲に築かれた古墳群も含め，いずれも 5 世紀末から 6 世紀代の古墳であるようで，5 世紀代まで遡り得る古墳としては，直径約 35 mの円墳である大鹿山 1 号墳が想定できるかもしれない。

古代になると，台地上に重要な施設が建ち並ぶようになる。7 世紀後半には，南浦遺跡（通称「大鹿廃寺」）で早くも古代寺院が建立される。市内の 7 世紀代の瓦は，平田遺跡や天王遺跡，土師南方遺跡等で出土し，山辺瓦窯跡で生産の痕跡が窺える。なお，この 7 世紀頃の集落は，境谷遺跡や国分寺跡などで確認されており，再び台地上で生活の痕跡が確認できる。

また，詳細な時期は不明ながら，伊勢国分寺跡の南に隣接して，古代河曲郡の郡衙とされる狐塚遺跡が確認されている。品の字に配置された政庁跡に加え，西方約 200 mには正倉が整然と建ち並ぶ。なお，これらの建物群は，国分寺建立以前の建物と推定され，国分寺建立に際して移動したと推定されるが，その場所は未発見となっている。なお，8 世紀後半以降は伊勢国分寺跡がそびえ，東方 200 ～ 300 mには国分尼寺も並存していたものと推定される。なお，これら国の重要施設は，古代官道とも無関係であったとは考えがたい。すなわち，東海道であるが，市内で東海道は確認されていない。ただし，平田遺跡では幅 9 mの直線的な道路が，断続的に約 130 mにもわたって検出されている。平田遺跡はちょうど，伊勢国分寺跡と，「国府」の名前が残る国府町との中間に位置し，あたかも両者を繋ぐ位置で検出されているのが示唆的である。

なお，古代豪族として『日本書紀』に大鹿氏の名が見え，鈴鹿市を本貫とする可能性が指摘されている。敏達天皇四年（575）の条がそれで，「次采女伊勢大鹿首小熊女菟名子夫人生太姫皇女更名櫻井皇女與糠手皇女更名田村皇女」とある。これによると，伊勢に大鹿氏という氏族があり，首姓を名乗っていること，小熊の娘に菟名子という人物がいて，采女として出仕していること，その菟名子が敏達天皇との間に 2 人の皇女を生んでいるとこと等が分かる。糠手姫皇女は後に坂押彦人皇子と結婚し，舒明天皇を生んでいる。『古事記』の雄略天皇の段にも「伊勢国三重の采女」や「伊勢の采女」やとの記述があり，大鹿氏の可能性も推定される。このように，大鹿氏は天皇家に繋がる家系であり，この時期に大鹿氏の本貫地でも何らかの変化があることも想像される。なお，大鹿氏の本貫地については，多気町相可の地を推定する説もあることを付記しておく。

その後は，伊勢神宮の創建から平安末期までの出来事を記した『太神宮諸雑事記』に，「河曲神戸預大鹿武則」の記録がある。河曲郡には神戸が設定されており，その役目を大鹿武則が負っていたとのことである。この時期の遺跡としては，鈴鹿川右岸の低位段丘上にある萱町遺跡で，9 世紀代の竪穴住居が見つかっている。また，同じ段丘上の十宮古里遺跡や須賀遺跡等でも，井戸や流路が見つかっている。このように，鈴鹿川右岸の低位段丘上に比較的古代後半期の遺跡が散見されるようになる。なお，河曲郡は面積が小さい割りに，延喜式によると式内社が二十座も存在し，中には「大鹿三宅神社」の名前も存在している。

一方，中世後半になると考古的な知見は多くなる。沢城跡では，沼状の周囲に盛土して築城した平城であることが確認されている。内部には礎石建ちの建物も存在し，土師器皿を大量消費する行為が行われていたことが明らかにされている。その後，16 世紀後半に神戸城へ移転したとされるが，館等はそのまま継続して利用されていた可能性も考えられる。また，十宮古里遺跡では，残念ながら建物の確認はなされていないが，おびただしい数の井戸が掘削され，多量の土器や陶磁器が投棄されていた。神戸城下の開発と軌を一にしている可能性があり，今後検証していく課題である。なお，磐城山遺跡でも，木田城に関わると推測される地割りとともに，礫を多数詰め込んだ土坑墓と推定される遺構が 4 基以上確認されている。

中世末期（1567 年）には，第 1 回目の織田信長の伊勢侵攻が行われる。この時は，神戸城の北約 3km の位置する高岡城において，山路弾正の指揮の下これを防いだという。当然，高岡城の西側に隣接する木田城跡も無関係でなかったはずである。しかしながら，翌 1568 年の第 2 回目の伊勢侵攻で再び襲撃された際には，耐え切れず，信長の三男である信孝と養子縁組みさせられ，後日乗っ取られていくこととなる。

3　検出遺構

竪穴住居 24 棟以上，溝，柱穴多数を確認した（図 2）。著しく重複するため，正確な数は不詳である。

(1) 竪穴住居

著しく重複するため正確な数は不明であるが，少なくとも 24 棟を確認した。そのほとんどは弥生時代後期の建物であるが，一部古墳時代後期まで下る建物も確認している。また，円形住居（五角形か）も確認しており，弥生時代後期を遡る可能性のものもある。基本的に 4 本の主柱穴を持ち，壁溝が全周する。南辺の中央付近に周壁溝を接するように土坑を持つものもある。床面の中央には焼土が確認される。

(2) 溝

竪穴住居の隅や南辺の中央土坑から派生してのびる溝が多く検出された。これらの大部分は排水溝と想定できる。いくつも重なるように北側の低い方向へのびているが，中には別の溝を接続しているものも確認される。

(3) 方形竪穴

室町時代頃と考えられる竪穴を確認した。3.3 m四方で，深さは 0.5m ほどある。床面には 3 箇所の柱穴を確認しているが，他の柱穴は不明である。住居でなく，倉庫などが推定されている施設であり，木田城跡との関わりが注目される。

(4) 門？

室町時代頃と推定される道路側溝を基底面まで下げた段階で柱穴を 4 箇所確認した。柱穴間は南北 2.2 m，東西 1.2 m程度離れている。西側に 2 基は検出面から 0.5 m以上の深さがあり，しっかりとしていた。西側の柱穴の上面には拳大の礫が散乱していたが，西側に比べると広く浅かった。

道路幅いっぱいにも柱穴が確認されているので，それを塞ぐ施設，すなわち「門」の可能性を考えている。この施設も木田城跡と関わっていると推定される。

4　出土遺物

今回の調査で出土した遺物は整理箱(55 × 33 × 10cm)で 68 箱にも及んだ。現在，現在整理作業中である。全体的にみると，弥生土器が大部分を占めるが，中には古墳時代の須恵器や中世の土師器（羽釜）などもある。竪穴住居や溝から出土した中には，一部良好なまとまりがある。また，時期不明ではあるが，金属製のインゴットのようなものも出土しており，今後理化学的な分析を依頼していく予定である。

5　調査の成果と課題

調査の結果，想像されていたように竪穴住居が 24 棟以上確認された。これらは主に弥生時代後期から古墳時代後期の建物だと考えられる。いくつもの建物が重複して築かれていて，非常に複雑な状況であった。これらの遺構の密度は県内でも随一で，発掘調査には非常に時間がかかっている。これまでの調査でみつかった竪穴住居の数は 200 棟をこえて，300 棟に迫る勢いである。まだまだ続いていることは明らかであり，極めて密度の高い遺跡だと評価できる。

また，室町から戦国時代の木田城跡に関わる地割溝や方形竪穴（倉）や門と想定される施設がみつかった。西へ調査区が進むにつれて木田城と関連する遺構が増えてきており，今後の調査の進展が期待される。

最後に，磐城山遺跡には 6 ～ 7 世紀頃に約 70 m四方の区画溝があるのではないかと想定されてきた。今回の調査区は，南辺の空白地を中心軸とみて東辺を反転した場合，西側の南北溝が想定される位置にあたる。しかしながら，今回の調査区ではその南北溝を見つけることができなかった（図 3)。中軸と想定している場所が間違っていて，より西方に存在している可能性はゼロではないが，さらに西側を調査した第 2 次調査でも確認されていないことを鑑みると，西辺は存在していなかった可能性が出てきた。今後も継続して調査を進め，解明していきたい。

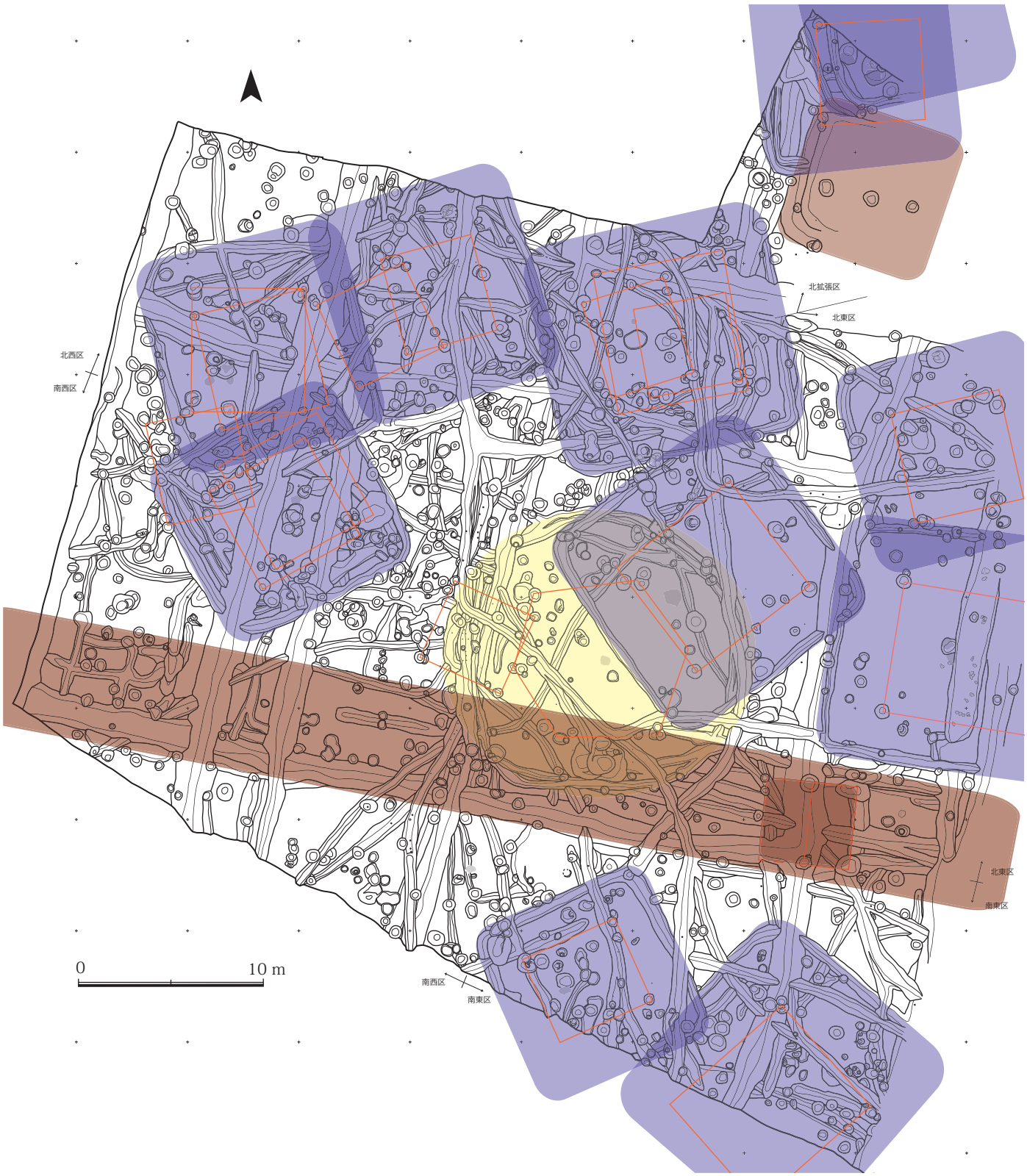

図 2　第 11 次調査区遺構配置図（1/150）

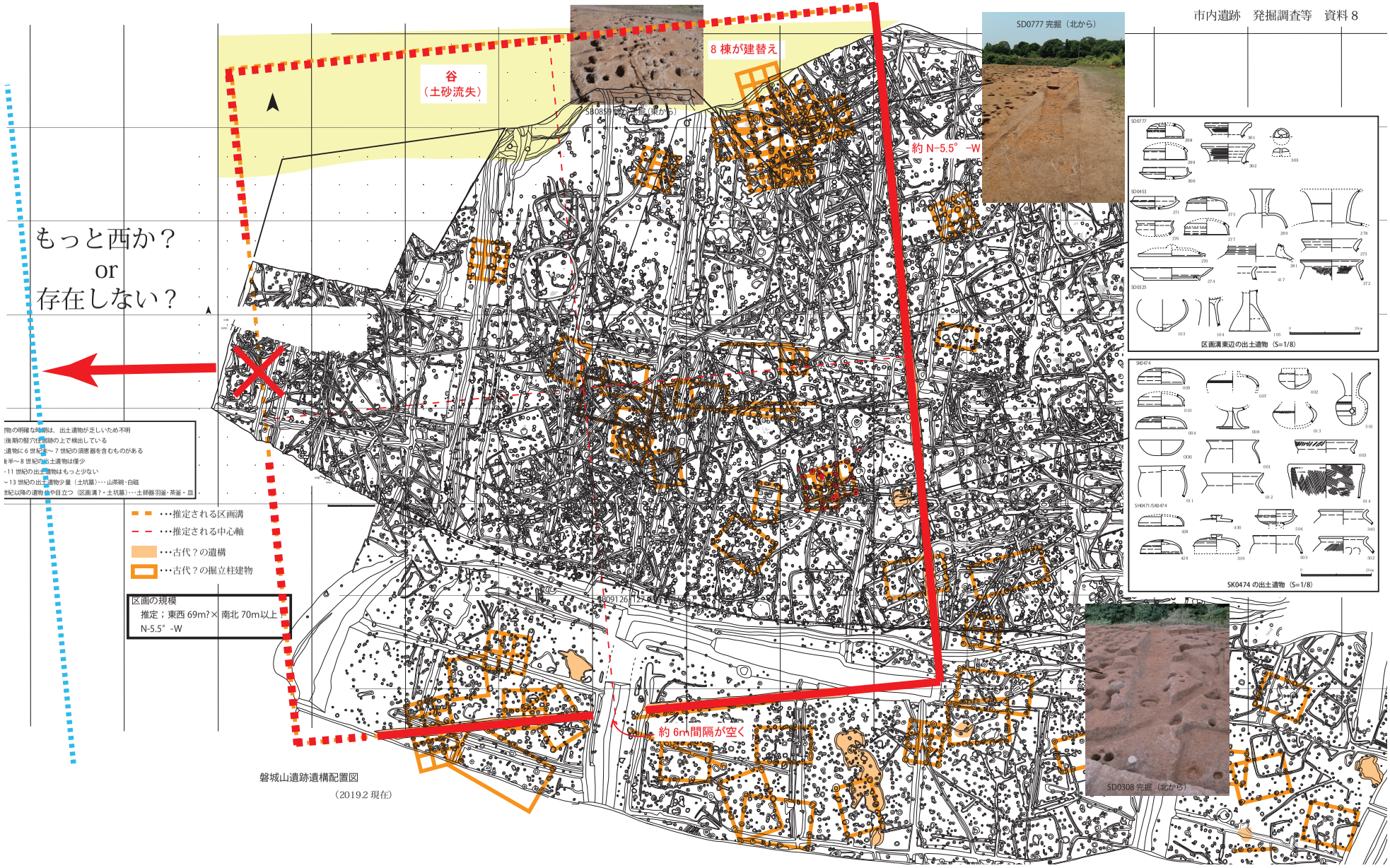

図３　磐城山遺跡における古代のｋ区画（任意）